

座談会

日本人教員が英語でおこなう英語の授業

Roundtable Discussion on English Classes Conducted in English by Japanese Instructors

とき: 2007年2月21日

参加者: 大藪 加奈 Oyabu, Kana

外国語教育研究センター教授

小林 恵美子 Kobayashi, Emiko

外国語教育研究センター助教授

コーディネータ: 結城 正美 Yuki, Masami Raker 外国語教育研究センター助教授

「英語の授業なのにどうして教員も学生も日本語を使うのですか？」と、アメリカ人学生から訊かれたことがある。日本人教員が日本語でおこなう英語の授業は、日本の学校現場の日常だと言えるだろう。しかし、これを〈日常〉として受け流してよいのだろうか。冒頭の問いを投げかけた学生は、アメリカで受けた日本語教育は入門レベルを除いて、ほぼ日本語だけでおこなわれていたと語っていたし、他国の状況や書籍をみても、外国語の授業はその目標言語でおこなわれる場合が多い。日本の学校教育現場では、ネイティブ教員の雇用によって英語でおこなう英語の授業は増えている。しかし、日本人教員が担当する英語の授業はどうなのだろうか。本座談会では、金沢大学の共通教育言語科目「英語 I」を基本的に英語でおこなっている日本人教員のなかから三名が集まり、日本人教員が英語でおこなう英語の授業について意見交換と議論をおこなった。

結城 この座談会では、英語 I の授業を日本人教員が英語でおこなうことについて、話し合いたいと思います。それで、授業の大半以上は英語でおこないつつ、場面に応じて日本語で補足するというバイリンガル形式、あるいは授業をすべて英語とするイマージョン形式で授業をしておられる大藪先生と小林先生、それに私を加えた三名で話を進めていきたいと思います。まずは、みなさんがどんな授業をなさっているのか、お話しいただけますか。大藪先生からお願いします。

多読のバイリンガルクラス

大藪 私が担当している英語 I はリーディングとライティングです。両方ともバイリンガルの授業です。すべて英語でおこなうというのではなく、こちらからの質問などは英語でおこない、学生がわからないとき、とくに説明などは日本語を使います。

結城 それは中級発展クラスですか、中級基礎クラスですか。

大藪 両方とも中級発展クラスです。

結城 学生の反応はどうか。

大藪 学生はそういうものだと思っているみたいですね。これは先生が英語を使ったり日本語を使ったりする授業だということを、はじめに話しています。

なぜ私がバイリンガルクラスにしようと思ったかという、以前はイマージョンでしていたのですが、全部英語だと、先生が何を言っているのかわからなくなった、という学生が毎年いたんですね。それで、たまに日本語を使うようにしました。とくに文化背景などは、英語で説明すると、学生にとっては英語の講義になってしまって理解しづらいので、日本語でするようにしました。

結城 授業中、学生の活動は多いのですか。

大藪 私はほとんどファシリテーターに徹していますので、ものを教えているというよりは学生が英語を使う機会を提供して、学生の活動に関してコメントするというふうにしています。

おもしろいのは、受講生の人数が多いと学生同士で相乗効果を生むんですね。私の授業ではこちらから指名するのではなく、答えたい学生が答えて、答えた学生にポイントをつける、というシステムでやっています。すると人数が30人以上のクラスの方が学生はよく答えるのですよ。いろいろな人がどんどん答えると自分も答えなくちゃ、と思うみたいです。クラスサイズが小さいと、授業中に何回も答える学生となかなか答えられない学生に分かれてしまってお互いの英語力が早くからわかってしまうので、自信のない学生はだんだん答えなくなってしまいます。クラスサイズが大きくなると一回の授業で一人が答える回数は減ってしまいます

が、他の人が答えている間に言いたいことを考えたり、多様な答え方があることが励みになって、継続的に多くの学生が学期末まで答え続けてくれます。

結城 少人数クラスが必ずしも良いわけではないのですか。小林先生はどんな授業をなさっていますか。

活動中心のイマージョンクラス

小林 私はリーディングとリスニングの授業を持っています。授業中はすべて英語です。ただ、リスニングの授業では、機材を壊してもらっては困るので、英語で機材説明した後に日本語で補足しています。

学生の感想を聞くということは、授業ではしていません。これをやりなさい、あれをやりなさい、といった指示とか、学生の耳から入って口から出すことは英語です、というかたちです。

結城 リーディングの授業では説明する場面もあると思うのですが、そういう場合も英語ですか。

小林 ひとつのものを熟読するというのではなく、TOEICなんかに出るような短いパッセージを速く読んで、問いに答える、という授業で、内容確認が主ですね。

リーディングは二部構成で、今言った内容のことを前半にします。後半は、**Graded Readers** の作品を教材に授業を進めます。学期中、学生は指定された3冊の本を熟読しなければなりません。そして、その内容を問う合計8枚のワークシートを完成させることが求め

られます。

授業では、その答え合わせをまずは学生同士で行います。その後、指名された学生が答えを黒板に書き出します。私が間違っていると指摘した場合は、再度、学生同士話し合って答えを導き出すという作業を続けます。

答え合わせが終わった後は、ワークシートに記載されている質問文とその解答をペアで音読し合います。とにかく、声に出して話すこと、そして、30分以上座りっぱなしの状態を作らないこと、これを英語の授業では心がけています。

それ以外に、学期中、学生は **Graded Readers** のレベル3かそれ以上の作品の中から自分の好きな作品を2つ選んで読み、**Book Report** を完成させなければなりません。**Report** では、自分が好き、嫌いな登場人物の特性や、なぜその人物が好き、嫌いなのかといった学生の主観を問うものや、作品の概要を時間を追って説明することが求められます。印象としては、学生自身が選んだ本についての感想を書くわけですので、まあ、希望的観測も含めて、それほど苦にはなっていないのでは...と思っています。

ペアワークの効用

結城 リスニングはどんな授業なのですか。

小林 とにかく聞くこと、そして聞いた内容を、**reproduce** することを中心に、LL 教室で行います。教科書に沿って、題材となる会話文についての基本的情報を確認した後、学生は各自、カセットテープに吹き込まれたその会話文をヘッドフォンを使って、ワークシートに書き込んでいきます。20分から30分、こちらが驚くぐ

らい、学生は集中してその作業に没頭していますよ。なかには途中で諦めてしまう学生もいるのですが、そういう場合は、空欄となっている単語の最初のアルファベットをヒントとして書いてあげると、俄然やる気がわいてくるみたいです。

聞き取り作業の後は、これまたヘッドフォンを通して、学生はペアで答え合わせをします。ペアは毎週、機械を使ってランダムに設定するので、学生にしたら楽しいのかもしれませんがね。

ペアワークの後は、クラス全体で答え合わせをしていきます。ワークシートのページごとにペアを指名して、その会話文をヘッドフォンをつけたまま読んでいきます。あてられた学生は、自分たちの声がヘッドフォンを通じてクラスに流れていると自覚しているので、かなり緊張していますね。

答え合わせが終わったら、今度は、立ってその会話文をペアで読んでいきます。やり方は色々あるのですが、互いに役を決めて読みあう時には、パラグラフごと暗記して、相手の目を見て話すよう指導しています。ワークシートを見ながら音読することは禁止しています。

続いて、自分の話す英語を確認する作業を行います。学生は自分の席に戻りヘッドセットをして、題材としている会話文の **slower version** を聞きます。テープは一文ごと間隔をおいて編集されているので、学生は、聞こえてくるネイティブの後に続いて、自分の声を録音していきます。全会話文を録音し終えた後は、テープを巻き戻して自分の英語を確認しながら、修正点があれば、各自、その箇所をもう一度録音し直します。これは非常に根気を要する作業で、意欲のある学生とない学生の差が歴然とします。

それから、毎週ではありませんが、Realistic English Drillsも教材として使っています。これは、間髪入れずに応対することを主な目的としたトレーニングです。例えば“Butter’s cheap in England, isn’t it?”に対しては“Oh no, I think the butter here’s expensive.”とか、“I’m going to the hospital.”には“You mean the hospital near here, I suppose.”といった具合に、瞬時に、しかも、文法的に正しい文を口頭で返せる力の習得を目指し導入しています。

大藪 あ、それいいですね。

小林 いい教材ですよ。あと、先ほどもお話ししましたように、私の授業では学生を30分以上座ったままの状態を作らないよう心がけています。リーディングの授業であれリスニングの授業であれ、とにかく、立って音読すること、そして、出来るだけ相手の目を見て話すことが肝要かと思っています。

音読への意識を変える

大藪 ずっと座ったままだとつらいですよ。あと、音読も大事ですよ。音読の効果は、ちゃんと学生に説明されていないんじゃないですかね。音読はみんなが声をそろえて一斉に読む、という感じだったら、音読が効果があるということを知らせておく必要はあるでしょう。それに、音読は高校でやってるだろうから、大学で同じやり方ではあまり新鮮味がないですね。高校のとはちがう音読のやり方を最初に教える必要はありますね。

結城 音読はたしかに大事で、私も授業で音

読させますが、発音もアクセントもイントネーションもなっていないのや、一語一語区切って読むという場合がほとんどですね。だからときどき、発音記号を説明したり、ブレンディングやリンケージのトレーニングをしたりします。What is your name?は四語ばらばらなんじゃなくて、ほとんど一語に聞こえるほどつながっている、というような説明をすることで、学生の意識も変わってくるんじゃないかと思います。

大藪 単語を読むんじゃなくて、意味のまとまりで話す、ということがわかればいいんですよ。高校までは、一語一語を正しく発音することに力を入れていたのだろうけど、そうじゃないということを大学でまず教えたいですよ。

結城 意味のまとまりで読むという意識が持てれば、リスニング力もつくでしょうね。リスニングができないという学生がよく言うのは、「ことばが繋がっていて聞き取れない」ということなので、語と語がリンクしたりブレンドしたりすることが音読をとおしてわかれば、リスニング力も一緒についてきますよ。

小林 1パラグラフのパスセージを音読する前に、あなただったらどこを強調しますか、という質問をしておく効果があります。リーディングの授業では、作者の意図しているところを踏まえ、1文ごと、どの単語が強調されるべきかを考えながら、その単語に記しをつけるよう指導しています。音読させる際にも、その単語を意識してゆっくり大きな声で発音すると、より英語らしく聞こえることを教えます。その成果でしょうか、学生も以前よりは意味を考えながら音読するようになったように思います。

結城 大藪先生も授業で音読をよく取り入れていらっしゃいますか。

多読で柔軟な思考を養う

大藪 私の授業ではその時間がないんですね。というも、45分はテストなんです。

結城 45分もテスト？ 毎回ですか？ 一体どんなテストなんですか。

大藪 だいたい毎週20ページくらいずつの予習範囲なんですけど、その内容についての問題を私が作ってきます。1番は基本的な読解問題10題。これは予習していれば必ず答えられる内容です。2番目は登場人物の行動などに対する自分の意見を論理的に述べる問題、3番目は、その週の内容に関するテーマ、たとえば **friendship** とか **death** とかについて、好きに書きなさい、というものです。全部英語での記述です。

そういうふうにしてると、テストだけで45分が過ぎてしまう。問題は紙に書いてあるわけではなくて、私が口頭で言うのを学生がディクテーションするんですね。わからない学生はわかるまで手をあげて繰り返し聞くわけです。だからテストの前の10か15分くらいは問題のディクテーションになります。

それで、授業の最後の30分は、本の内容やそれに関係のあることに関して私の質問に英語で答えたりグループで活動したり、分からなかったところがあれば質問してもらって、その説明をします。

この時間はこちらからありとあらゆる質問を英語でして、どんどん答えてもらいます。

結城 先生の授業では EFL 学習者用のテキストではなくて、**Penguin** とか一般に出回っている本を使っていらっしゃるんですね。

大藪 扱っているのは、まだ翻訳の出ていないイギリスの児童文学です。中級発展だと、だいたい母語の対象読者年齢で14歳くらいのテキストで、普通クラスなら12歳くらいですかね。

結城 でも学生は読む量の多さに圧倒されるんじゃないですか。

大藪 最初は大変みたいですね。一字一句訳そうとして、予習に8時間とか10時間とかかかるみたいです。そのうちに読み方が分かってきて学期半ばで予習時間3時間ぐらい、学期終わりには1時間から2時間ぐらいになるようです。

結城 でも多読できるようになると、学生は自信がつかますね。

大藪 早く読めるようになったという実感はあるみたいですね。斜め読みができるようになるんです。読み方としては、余白にどんどん書き込みをきなさいと指導します。何が起こったかとか、誰についてのパラグラフかとか書いて、大事そうなところにマーカーや下線を引いたりしながら予習するようになって。この授業では、一字一句全部分かる必要はなくて、ざっと読んでほしい内容がつかめればいいのです。あの登場人物は何て名前だっけ、P で始まった記憶があるんだけど...と、それでいいんですよ。名前が必要になったら、探せばいいわけで。一回ざっと読んだところから、必要な情報を取

り出す訓練をしているんです。

結城 そうやっているのと、自然にスキヤニングとかスキミングとか速読スキルがついてきますね。

大藪 そう。テストでは学生はばーっとページをめくりながらどんどん情報を取り出していきます。

今は、採点した答案を翌週返しているのですが、実は授業の最後に1番だけでも答え合わせをするほうがいいのかな、と思います。今の学生は待てないみたいで、早く答えや点数がしりたい。以前教室でテスト後に答え合わせしようとしたら、記述式だからみんな答えが少しずつ違って、「これは何点ですか？」「これなら何点？」って質問が殺到して、答えているうちに他のことが何もできなくなってやめたのですが...

結城 完全な答えなどないわけで、いろんな答えの可能性があるということを知ることは重要ですね。ひとつの完全な答えがあると思っ込んでいる学生が多いので、まずはそういう考えから自由になる手助けをしないとイケない。いろんな人がいろんな考えを持っているわけですから...。ちがいがわかるということは大事ですよ。

大藪 基本的な読解問題の場合、正解の内容は大体同じになりますが、それでも答え方は多様ですね。だから、授業の最後にみんなで答え合わせするのは、いろんな人の考えに触れる機会になって、とても良いとは思っていますね。

結城先生はどんな授業をされているんです

か。

バイリンガルの中級基礎クラス

結城 私はリーディングとライティングを担当していて、どちらもバイリンガルでおこなう中級基礎レベルです。中級基礎はあまり開講されていないせいか、受講希望者が多かったですね。抽選して定員いっぱいとなりました。授業は指示とか簡単な説明は英語を使い、ちょっと複雑な解説なんかは日本語でします。

リーディングではエッセイとか時事的な文章を読んでいて、基本的に速読です。だから読み込むというよりは、さーっと内容をとっていくというかたちです。よくやるのはパラグラフサマリーです。これは逐語訳より絶対に大変で、わかってないとできない。パラグラフサマリーは、本当は英語でもらいたいんですが、中級基礎だということを考慮して、英語でも日本語でもどちらでもいいことにしています。ほぼ全員、日本語で要約しますね。あと先ほど出てきたペアワークもよく取り入れます。ペアワークも英語でやってほしいので、日本語が聞こえると、結構しつこく英語で注意してます。

ライティングの授業は、到達目標がパラグラフを書けるようになるということなので、それに向けてテキスト(注 すべて英語で書かれている)に沿って進めています。指示とか説明は英語ですが、似たようなことがテキストに書かれているので、学生は耳と目の両方で英語を追っているから理解しやすいみたいですね。

大藪 中級基礎でもライティングに結構学生が集まるんですね。

結城 定員 30 人のクラスですが、その倍近く

希望があったんじゃないかな。学生の話聞いていても、ライティングはかなり必要だと思っているみたいですね。E-mail を書くにせよ、ぱぱっと文章書くにせよ、実用的だと思われるみたいですよ。

大藪 私は中級発展のライティングなんで、ライティングの授業をとる学生は意識が高いのかなーと思っていたんですが、そうでもないんですね。今度から私も中級基礎のライティング担当してみようかな。

ライティングのフィードバック

結城 学生のライティングへのフィードバックはどうなさっていますか。添削はなさいますか？

大藪 ライティングの場合は、基本的に一字一句英語は直しません。もちろん、学生が辞書引いて頑張って使っている言葉が文脈上おかしいときには、その語は「こういう文脈では使えるが、ここでは使えない。別の単語を探そう。」というようなサジェスションはしますけど。

それよりも、エッセイとしてどうか、というところに重点を置いています。ここは接続のしかたが論理的でないとか、これはトピックセンテンスの理由としては不適切とか。英語的な思考・論理に沿った文章になっているかを指導します。中級発展レベルなので、センテンス単位の英語の間違ひは注意喚起すれば書き直し時には大体直りますので。

結城 コメントは英語ですか？

大藪 これもバイリンガルですね。以前は全部英語で書いていたんだけど、いまは Good と書

いた後に、「でも論理的におかしい」というようなコメントを付けたりしてます。きつくなりすぎたかなと思ったときには、にこっと笑った顔のマーク◎をつけて和らげようとしたり(笑)。

結城 私も学生の書いたものを直すということにはしないですね。たぶんこちらが逐一直しても、学生はあんまり見ない。だから、間違っている箇所には線を引いて、そこに *awk(ward)*、*unclear*、*vague* というようなことばを書くくらいです。He say になってるところは、says と直したいんだけど、私がそれをやってはいけないわけで、awk. と書くにとどめます。学生自身に気づいてほしいので。

それで、何回かはリヴィジョンの機会を設けて、私の朱入れとコメントを参考にしながら、awkward な箇所を直し、unclear な議論はクリアにする、というような作業をさせます。毎回リヴァイスさせていると授業がまわらなくなるので、学期中何回かに限ってますけど。

大藪 リヴィジョンはそんなに負担にならないですよ。毎回させてますけど、最初のライティングにはきっちりコメントしておいて、書き直しではそれと比較して採点するだけで、とくにコメントはしません。

結城 ライティングの評価は主観的にならざるを得ないような気がします。基本的には A, B, C、で、それにプラスマイナスがついたり、それより細かくなると B+/A- というのを付けたりしますが、それでも主観的な判断なんですね。学生には異議申し立てがあれば受け付けると言ってますが、これまで文句は出てこなかったもので、納得してるみたいです。大藪先生はどうなさっていますか。

大藪 私は評価基準をはっきり決めておきます。たとえば、今週はトピックセンテンスができていれば何点、次は introduction/body/conclusion の形ができていれば何点、パラグラフ内の構成がきちんとしていれば何点というように。英語のエッセイとしての形が整っていることが大事なんです。だから、10 週間くらいは形を整えることを目標にします。最初は形はわからない、自分の考えは出てこない、で大変ですが、形を覚えてしまえば、いろんな考えをその形にあてはめて書けるようになります。頭が整理されて考えも浮かびやすくなるみたい。

結城 先生のライティングの授業は、パラグラフではなくてエッセイライティングなんですね。

大藪 TOEFL のライティングをモデルにしています。TOEFL では 30 分で 300 語ぐらい書くことが必要ですが、この授業の到達目標は、その場であたえられたトピックについて、一時間で 300 語ぐらいの形の整ったエッセイを書くことです。

あと、これは学生に不評なんですけど、ライティングの授業ではエッセイ書きの前にテストもしています。穴埋めテストなんですけど、300 語ぐらいの例文を 3 つくらい覚えてきてもらって、穴埋めにして出すんです。

結城 えっ、それ暗記しないとできない問題なんですか？ 語彙リストから選ぶという形式ではなくて？

ペアワークをデザインする

大藪 そう、選択じゃないんですよ。ただまっ

たく同じ言葉でなくても意味が同じになればいいんです。しかも学生が一人一人するのではなくて、ペアで取り組むテストなんです。

結城 それはちょっと気が楽ですね。

大藪 最初のうちは、ペアだから気が楽だと思ってるみたいですけど、学生同士のプレッシャーというのは結構大きいみたいですよ。私が言ってもなかなか勉強してこなくても、ペアのテストだと二人で相談してやるわけですから、全く自分が貢献できないと辛いみたいです。わりとまじめに勉強してきますね。ここは名詞のはずだとか、こんな意味の単語だったとか、相談しながら答えています。答えあわせも他のペアの答案を二人でつけ、その後、自分たちの答案を返してもらって点数確認します。

結城 学生はペアワークを英語でしてますか？

大藪 日本語ですね。

結城 私の授業でも、ペアワーク中は日本語がよく聞こえてきます。“Use English!”ってあんまり言うのも雰囲気悪くするし、状況によって妥協してます。

ペアワークでも、What do you think?と意見を問うかたちのものは、英語だと進まないみたいです。私はいわゆる答え合わせは、まずペアでさせてからクラス全体でするんですが、そういう場合は、一方が英語で質問でして相手が英語で答える、というふうに、英語でのペアワークがうまくおこなわれています。パターンを与えてあげると学生は英語で活動しますね。

大藪 私の課外グループワークは強制的に英語でさせなくてもいいかな、と思っています。クラスで発表させるものをペアで考えさせると、発表は英語でおこなうので、当然ペアワークでも英語を使うようになるし、そういうやり方もあると思う。

「正しい英語」という幻想

結城 みなさんいろんな工夫をなさって授業をなさっているわけですが、バイリンガルないしイマージョンで授業をするというときに、モデルあるいは理想としている授業というのはありますか。

大藪 英語で授業をしようと思ったのは、学部時代に受けた英語教育法の先生の影響でしょうね。すごい日本語なまりの英語で授業なさる先生だったんですね。最初は、「あんな英語でよくはずかしくないねー。」と同級生と笑ってたんですが、だんだんあれでいいんだなって思うようになったんです。日本語なまりの英語でいいから、自分の伝えたいことをはっきり大きな声で言うということが大事なんだと思いました。あの先生が私に人前で英語を話す自信を与えてくださったと思います。だから、学生に笑われたっていいから、伝わるように英語で言えばいいんですよ。

結城 正しい英語というか、ネイティブのようにきれいに流暢に話せなければいけない、というオブセッションがあるように思うんですね。学生を見ているとそうですし、私自身もずっとそうだったわけです。だから、日本人教員が英語で授業するのに接していると、学生はある意味で気が楽になるんじゃないですかね。

大藪 正しい英語というのは観念でしかないですからね。イギリスの英語をみても、正しい英語なんかないわけで、労働者階級には労働者階級の英語があり、女王陛下ですら女王陛下なまりの英語を話している。文法もみんなちがうし語彙もちがう。イギリスにいと、英語ってひとつじゃないんだなと思いますよ。だから、自分の話す英語も英語のひとつなんだと。もちろん教育を受けた人の英語というのはあって、大学ではそれをめざすのですけれど、発音はこうでなければいけない、っていうことはない。アメリカもそうでしょ？

小林 メジャーなグループである白人は、他の人たちの英語をわかろうとしますよね。黒人やヒスパニック系、アジア系など、多くの人種が混在する社会ですから、生活していく上で不可欠なのでしょう。発音や語彙、文法など、多様な英語に対しての寛容度が高いように思います。

結城 英語 I のアンケート調査(注)の結果をみておもしろいなと思ったのは、ネイティブの先生に「正しい発音」「正しい英語」を教えてほしいという学生の声が結構あるんですよ。正しい英語があるという幻想に縛られてしまっているんですね。

小林 ネイティブの先生には、モデルというか、学生が最終的に目標とする存在でいてほしいと思います。

大藪 「英語は外人、日本語は日本人」、という関係ができちゃってますよね。それで教室でも、ネイティブは発音、日本人は文法というふうになってしまっている。日本人教員が英語で

話すと、この二元化されてしまっている構図が変わって、学生に「日本人と英語」という組み合わせのモデルを提供することになると思います。

結城 文科省の調査にあります、中高の英語の授業がどれだけ英語でおこなわれているかをみても、OCを除いてほとんど日本語ですよ。それに、学年が上がるごとに教室での英語の使用頻度は減っていつてます。

入試対策上、日本語で英語の説明をするというのは不可欠なのかもしれませんが、大学では「正しい英語」という幻想から学生を自由にしないといけないんじゃないかなと思います。日本人教師が英語で英語の授業をするということの意義は、学生の意識を変える上で小さくないと思います。

オーセンティックな英語

大藪 これも考えてたのですが、英語の授業でオーセンティックな英語は何かということですね。人がものを習得する方法として、知識として学ぶよりも、自分が「自分」として関われる「本物」の状況から学ぶ方が、学びの対象を自分のものにしやすい、ということがありますね。教材の英語はある意味その英語の属する「場所」(コンテキスト)から切り離された英語ですね。けれども、学生と教師をつなぐ教室英語は、オーセンティックな性格を持っていますから、ここで英語を使うことによって、学生はその経験を「本物」の英語使用経験として自分のものにする事ができると思うんですよ。

語学を学ぶというのは、大学レベルでは英語の知識を習うというよりも、英語という言語が使われるいわゆる「英語使用空間」における社

会環境を学ぶということだと思います。何で学生は自分の意見を言えないのか、発表できないのか、と考えてみると、意見を言うことがそれほど求められていない日本の教室環境での学習態度を英語の授業にも持ち込んでしまってる。そんな学生にちがう学習態度をとってもらうには、別の環境を提供する必要がありますね。

以前、小学校英語のモデル校だった南小立野小学校の授業参観に行ったのですが、子供たちは普通の教室とは違う英語の教室にやってくるまで学んでいました。そこは教室とは全く違うレイアウトで、机などもない。授業が始まると先生が部屋のドアをノックして **May I come in?**と聞いていました。英語の授業を受けるかどうかは生徒が決めるわけですね。普通の授業ノームとは違う行動ができる部屋で、いつもの先生と生徒の力関係とは違う教師と子どもの関係が作り出されていたわけです。人間の行動というのは、自分が今いる「場」をどう認識するかによって変わってくるものだから、「場」を変えることや教員と学生の力関係を変える事で学生の行動を変えることは可能ですね。

大学で、通常教室を特別な「場」にするのはなかなかむずかしくて、教員の力量が問われますね。イマジネーション豊かな教員は、教室をオーセンティックな「英語使用空間」に変える才能があります。そんな「教室の魔術師」でなくてもできるのが、教員と学生の力関係を変えることだと思います。

学生は、教師というのは知識を持っていて、教室でそれを教え、自分は教師の言うことを受動的に聞くものだと思っているわけですよ。ところが日本人教員が英語で授業すると、そりゃネイティブみたいな英語は話せませんから、間違いもいっぱいしますし、学生も「あの先生

は完璧じゃない」と思いますよね。そこで力関係が変わってきて、学生が発言しやすくなるということはありますね。

結城 それ、ありますよね。英語を使うことで場は変わりますよ。

それから、学生に注意するときなんかは、日本語だときつく聞こえてしまうのですが、英語だとやりやすいですね。指名しても黙ってる学生って多いですよね。以前は、時間の無駄だし、黙ってる学生を待ってないで次の学生を当てていたんですけど、それじゃいけないと気づいたんですね。つまり、学生はこれまで、指名されても黙っていれば次の学生にいくという状況にいたわけで、それが身に染み付いてしまっている。でも、これは人の質問を無視しているわけで、大変失礼にあたる。英語使用空間では完全にアウトです。最近はだから、しつこくなりました。指名しても学生が黙っていると、“So, what do you think?” “. . . .” “I’m waiting. Say something. If you need more time, say so.” と粘ります。そうすると、“I’m still thinking”とか何らかの反応があります。これを日本語でやると、ちょっときつく聞こえちゃいますね。英語だからサラッと言える気がする。

大藪 それから、日本語だと言えないけど英語だと言えることってありますよね。自分の考えて、日本語だと恥ずかしくて言えないことでも、英語だと言える。あと、賛成か反対かをはっきり言うのも、英語だからできることってありますよね。

小林 コミュニケーション学では、話す言語によって自分のアイデンティティや性格が変わる

と理論化されているのですよ。日本人の場合は、英語を話す時の方がよりオープンに、積極的に、コミュニケーションを図るという調査結果が出ています。

それから、自身や相手の否定的行動を理解しようとする際、日本人はその原因を自分や相手の個人的、性質的特性といった内的要因に帰する傾向が強いそうです。一方欧米人は、課された役割や課題、状況といった外的要因に原因を求める傾向が強いそうです。つまり、あとに引きずらないんですね。人間関係にも支障をきたしにくいんだと思います。だから、「旅の恥はかき捨て」じゃないですけど、周りの目を気にせず、自分の思っていることを口に出して言う、これを日本人学生には実践してほしいですね。

結城 英語の授業は、英語力を上げるだけじゃなくて、英語使用空間で通用するふるまいとかスキルとか、そういうものも教える場ですね。

大藪 その意味では、大学というのは良いですよ。高校とはちがうことができます。どんな授業をしても、「大学なんだから」と学生たちは受け入れてくれる。学生の受入れ能力は高いですよ。まったく高校と同じ授業をしてたら、学生は「なあんだ、高校と変わらないじゃないか」と思ってしまいますよ。

英語だから保てる緊張感

小林 授業を英語でしていても、ちょっと日本語を使ってしまったら、学生は「先生も日本語使っているんだから、自分も日本語でいいだろう」と思ってしまいますよね。それで緊張感が

なくなってしまう危険はあるように思います。英語で授業していると、緊張感が保てる感じがするんですね。

あと、ネイティブではないということに加えて、女性だからということで、教員を軽視する向きもないではないですね。

大藪・結城 えーっ、女性教員は軽視されているんですか??? それは全然気づかなかった。

小林 ここ(金大)はまだわかりませんが、ほかではありますよ。

結城 話は変わりますが、授業で日本語を使うと、難しいことを言おうとしてしまいませんか? 英語だと簡単には難しいことが言えないわけで、説明なんかも簡潔になって、授業がわかりやすくなるんじゃないかな。日本語を使うと、説明が長く難しくなって、講義みたいになってしまう。

大藪 学生がじーっと聞いてるだけで、活動しない時間が長くなりますよね。

結城 英語で授業することで、学生の活動が多くなるのかもしれない。

小林 それに、英語での授業だと、聞いてるだけでもリスニングのトレーニングになりますし。

今後の課題

結城 これまで現在の授業についてお話をうかがってきたのですが、今後の課題はありますか。

小林 先ほども出ましたが、“What do you think?”と訊いたときに沈黙する学生が多いので、それにどう対応するかが私の今後の課題です。

大藪 日本語で訊いても沈黙しますよ。

小林 あと、授業でも、ついつい普段使っている英語のスピードで話してしまって、学生には速すぎてついてこれないみたいなので、気をつけないといけないと思っています。

結城 それはそれでいいんじゃないですか?

大藪 リスニングのクラスだしね。

小林 でも、ゆっくりクリアに話す方がいいのかなと思います。

大藪 アンケート調査では、日本人教員の英語はクリアでわかりやすいという肯定的な意見が多かったですよね。

小林 英語でおこなう授業の利点は、授業で学生と程よい心理的距離がおけて、緊張感が保てるということだと思います。注意なんかも英語だとしやすいですよ。「怠けているんだったら出て行きなさい」というのも、日本語だときつくなるけど、英語だとそんなことはないし。

結城 そうそう、日本語で言っちゃうと根に持たれそう。でも英語だと注意で終わるといふか。

学生に自信をもたせる

結城 私、英語の授業で黙ってる学生の気持

ちってよくわかるんですよ。自分もじつはそうだったし。「正しい英語」幻想にしばられた、完璧主義者だったような気がします。留学してた頃も、最初は下手な英語を人前にさらしたくないという気持ちで、あんまり発言しなかった。でも、専門の授業で先生が“Nobody is perfect.”というようなことを言って、はっとさせられたんです。考えてみれば、母語である日本語も私はパーフェクトに話せるわけではない。「一みたいな感じ」とかいっぱい使いますしね(笑)。学生にも、どれだけ正しい日本語が使えるか訊いてみるんです。すると、自分の日本語がかなりくだけているとか文法的に正しくないということに気づきますよね。日本語ですらそうなんだから、英語を使う時ももっと気楽に構えたら、とアドバイスするようにしています。

完璧じゃなくていい、という意識を、バイリンガルクラスでもってもらえたらなと思っています。

イマージョンにしない理由は、英語 I はいやいや取ってる学生もいるからなんです。とくに私は中級基礎レベルで授業してますから、英語が苦手な学生が少なくない。英語 III はイマージョンですが、英語 I は日本語を入れないと学生にきつかなという印象は持っています。

大藪 私はそこのところで揺れてるんですね。むかしイマージョンでやっていた頃は、中級基礎とか中級発展とかなかったので、いろんな学生が来ていたと思うんですが、授業外でも英語で通していたんですね。廊下で会っても“Hi”という感じで。その学生が2年生になって、ばったり会ったときに「こんにちは」って言ったら、「先生って日本語しゃべれるんですね」って言われたんです。

小林 それ、私もあります。「先生って日本語しゃべれるんですか!？」って驚かれたことがありますよ。

大藪 それは学生にとってよかったんじゃないかと思うんですね。「あの先生は日本語しゃべれないし、がんばって英語で話さない」と学生は思ってるわけですよ。顔がどんな顔であれ、発音がどんな発音であれ、学生が「この先生とは英語で話すんだ」という意識をもつことが、イマージョンではできますよね。

小林 日本語でしゃべっちゃうと、どうしても学生にも甘えがでできますよね。

大藪 それにバイリンガルで授業していると、本当は学生に英語で答えてほしいところを「先生も日本語使ってるんだから」と日本語使うわけですよ。そうすると、私が学生の英語を使う機会を奪っているような気がするわけです。

教室の中は英語で、教室外では日本語でフォローするというのがいいのかなと最近は思っています。

小林 イマージョンだと、学生が授業中に疑問を持っても、質問されないままに授業が終わってしまう。質問は他の学生も思ってることかもしれないから、授業中に言ってほしいんだけど、なかなかイマージョンだとそれは難しいみたいですね。

たまにするんですけど、授業後に学生が教卓に来て日本語で質問しても、理解できないふりします。“I don't speak Japanese.”って言ったりして。

大藪・結城 おお、それはすごい。

小林 そうすると学生はトライします。文法めちゃくちゃなんだけど、がんばって伝えようとする。だから、このやり方はいいかなと思っています。前任校でも、そうしている日本人の先生はいましたしね。「この先生には英語で話す」というふうに学生の意識が変わってくると思うんですよ。

英語 I の今後

結城 アンケート調査をみていると、授業では英語にできるだけ触れていきたいけど、英語だけだときつい、日本語も適宜使ってほしいという意見が大半です。でもこれはあくまで学生側の要望なので、教員があわせる必要はない。一方で、学生の不安もわかるんですね。英語だけだとどこまで理解できるかわからないという不安。でも、その不安をあえてイマージョンで取り除いてあげるといふか、全部わからなくてもいいんだと学生に開き直ってもらうことも必要かなと思います。

大藪 クラスにもよりますよね。学生がここは日本語してほしいといつも言うのは文法ですよ。文法説明は英語でやると余計わからなくなる。イマージョンに向き不向き授業というのはありますね。

結城 これまでお話をうかがっていると、今後も英語 I は最低バイリンガル、できればイマージョンがいいのではないかという見解が出されたと思うのですが、その点についていかがですか。

大藪 やっぱイマージョンがいいかな、またイマージョンでやってみようかなって気持ち

ちになりましたね。

小林 文法など、日本語で教えたほうが効果的な授業もあると思います。ですが、そういった例外的授業を除けば、バイリンガルやイマージョン形態は、英語という一つの言語を習得する上でも、又、英語圏文化の価値観に触れる上でも役に立つと思います。

結城 今日はいろいろお話を聞かせていただき、今後の授業改善のためのヒントがたくさん得られました。ありがとうございました。

注 本座談会で言及されているアンケートとは、英語 I の教室言語に関するアンケートを指す。アンケートの内容は、結城正美「教室 SLA と使用言語」(本誌収録)に掲載されている。



(左から、大藪教授、小林助教授、結城助教授)